

み出す場として位置づけられ、共和国による積極的な介入を受けることになった。ところが同時に、パドヴァ大学はヴェネツィアによる振興政策を背景に各地から学生を集め続け、「地方性と普遍性」を両立させることで、それまで以上の発展を遂げたのである。

さて欧米における大学史研究は一九世紀にさかのぼる伝統を有しているが、近年はジャック・ヴェルジェ『ヨーロッパ中世末期の学識者』（野口洋一訳、創文社、二〇〇五年）のように、教育史・学校史の枠にとどまらず、文化や社会、政治といった広い文脈との関わりの中で教育や知識人の展開を明らかにする研究が増加してきたように思われる。わが国における中世大学史研究もまた大きな発展の兆しを示している。単著として読めるものには、フランス・パリ大学の諸相を扱った田中峰雄『知の運動』（ミネルヴァ書房、一九九五年）、広くドイツ全体を対象とする平野一郎『中世末期ドイツ大学成立史研究』（名古屋外国語大学、二〇〇一年）等がある。本書は地域としては初めてイタリアを専門的に取り扱った研究書であり、時代としては大学草創

期から中世末期までを中心に、大学の起源や機能という根本的な問題を論じ、さらには近世以降の展望に関しても極めて示唆に富む内容となっている。地域と時代を超えて伝播し、絶えず変化を経験しつつ今日なお存続する大学という組織、また教育史のみにとどまらない「知の歴史」に興味を持たれている方にも是非一読をお勧めしたい。（A5判 三八五七〇頁 二〇〇七年二月）

名古屋大学出版会 税別七六〇〇円
（中田忠理子 京都大学大学院文学研究科修士課程）

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著

『モダン都市の系譜』

——地図から読み解く社会と空間——

本書は、大阪・京都・神戸を中心とする京阪神地域の諸都市を対象に、前近代から今日までの都市形成の諸過程におけるさまざまな局面で、どのように政治力学が作用しながら都市空間が構築されてきたか、その諸相を具体的に提示しようとするものである。大きな特徴は、さまざまなスケール

の地図（地形図、市街図、主題図など）や空中写真、景観写真等が多用されていることである。地図読解とフィールドワークをセットとして都市空間に切り込むアプローチの有効性を、地理学の研究者や学生たちだけでなく、広く一般の読者にも示そうとする筆者たちの意図は明確である。加えて、新聞、自伝、文学等を豊富に引用し、都市空間にかかわる記述や言説、表象のされ方から、人々が都市空間をどのように消費したかを明らかにしようとしている点にも特色がある。

全体の構成は、四部一〇章からなり、各章ごとに特論として一―三のケーススタディが紹介されている。まず第一部「近代都市空間の成立」では、明治・大正期に城下町が変貌する様子が描かれる。無秩序で自然発生的な新市街地が旧中心市街の周縁に出現し、インナーリングが形成された。この地域は、その後の都市空間形成の主要な舞台である一方で、前近代の都市空間の特質をさまざまに反映する地でもあったことが指摘されている。

第二部「モダン都市」では、大正から昭和にかけて、郊外や盛り場という新しい都

市空間が出現したことを取り上げている。郊外住宅地は、民営鉄道会社が郊外生活という新しいライフスタイルを提案し、都市と近郊を結ぶ路線を敷設するという、ソフトとハードの戦略を通じて実現した。商店街を盛り場へと変えた要因の一つは、ウィンドウショッピングや街歩きを楽しむという都市空間の消費スタイルの変化であったと論じられている。この時期の急速な都市膨張と都市社会の変容に対応するため、一九一九年の都市計画法公布以後、都市計画と社会調査・社会政策とが並行して推進されてゆく。

第三部「戦災と復興」では、戦時中から戦争直後の時期に実施された一連の都市政策について述べている。都市計画と土木の官僚の主導で新興工業都市計画が進められ、土地区画整理事業が実施される一方、軍需工場や軍施設の立地で突発した大量の住宅需要をまかなうために住宅営団が設立される。戦時下の建築疎開や空襲による破壊、さらに、戦後の都市区画整理事業実施というプロセスのなかで、多くの都市は急速な復興を果たしたが、都市の景観に歴史的な要素が失われ、画一化する結果にもなった。

第四部「高度成長と現代の都市空間」では、昭和三〇年代以降、経済復興とともに都市化が再び急速になった時期に顕在化した二つの問題を取り上げている。一つは、未整備地の無断・無許可使用によるバラック居住の集積地、いわゆるバラック／スラムの問題であり、他の一つは、アウトリーングで無秩序開発の進むスプロール地帯の発生である。前者は、同和地区を中心とする住宅改良や住環境整備の実施により解決が図られ、後者は、さまざまなタイプの住宅団地の開発という形で解消が図られた。

以上のような近現代期における京阪神地域の都市空間形成の様相が、一〇の章および一六の特論を通じて、さまざまな事例やエピソードによって活写され、多数の地図や写真が状況を想起する手助けをしている。こうした論述によって、都市形成を規定するメカニズムやプロセスだけでなく、都市社会のさまざまな集団、とりわけ下層にあるつてともすれば犠牲になりがちな人々の実態についても理解を深めることができる。本書に対し、読者への配慮をさらに望む点がないわけではない。大半の地図が十分に鮮明とは言い難い。スキャナーによるデ

ジタルデータを用いた地図が多く、解像度が低いため、トーンが淡く、描線が不明瞭である。空間パターンの描写として読者へのインパクトが弱いだけでなく、街区や地名など、読解そのものが困難なものがある。また、凡例が図示されず、注記による説明にとどまる図、縮尺と方位を欠く図もある。読図術が主題であると謳う著者たちの意が十分にくみ取れない。また、本文中で（）内に引用文献を示しているが、関連する文献のリストが文末に挙げられていれば、読者の手引きとなったと思う。なお、スペルミス、用語の不統一等が散見されるのも惜しまれる。

本書の特質は、都市周縁のインナーリングの魅力を前面に出した近現代・都市空間論にある。都市を形作るさまざまな要素、旧来のものと新奇なもの、光と影、表と裏、調和と対立、これらすべてが共存し混交する地として、インナーリングに焦点を当て、その復興を目指している点に、大阪の街を徹底的に歩き込んだ三人の著者の個性と愛着が如実に表れている。本書に刺激されて、街歩きに出かけたくなる読者、あるいは都市の魅力を再認識する読者は少なくなかる

うと想像する。

(A5版 三三五頁 二〇〇八年五月)

ナカニシヤ出版 税別二八〇〇円

(田中和子 京都大学大学院文学研究科)

受 贈 誌

(二〇〇八年一月二〇日) 二〇〇八年一月二三日)

アジア研究所所報(亜細亜大学アジア研究所) 一三三

社会経済史学(社会経済史学会) 七四—
オリエント(日本オリエント学会) 五一—

一橋研究(一橋大学大学院一橋研究編集委員会) 三三—二(通巻一六〇)

人文地理(人文地理学会) 六〇—四
哲學研究(京都哲學會) 五八六

日本史研究(日本史研究会) 五五四
撰大人文学(撰南大学外国語学部) 一六
日本研究(国際日本文化研究センター) 三
八

史學雜誌(史學會(東京大学文学部内))
一一七一—九

九州国際大学 法学論集(九州国際大学法学会) 一五一—

日本歴史(日本歴史学編集) 七二—六

CHRONOS クロノス(京都橘女子大学女性歴史文化研究所) 二九

編 集 後 記

九二巻二号をお届けします。本号に掲載されました九本の論考の内容にかかわらずキーワードを順に並べますと、モノの変遷と社会の性格、政治・統治における言説、政治議論の組織化、戦争・支配と経済・通貨、法体系、シテイズンシップ、ナショナルイズム、大学、都市空間の形成、といったものとなるでしょうか。私たちがいま置かれている現在を意識せずには読むことができないものばかりであり、また、時を経てあらためて違った読み方ができる楽しさをもった力作ばかりです。ご検討ください。(山口育人)

◆史学研究会ホームページ・アドレス

<http://www.soc.ni.ac.jp/shr/index.html>

二〇〇九年三月二五日印刷 定価一、二〇〇円
二〇〇九年三月二一日発行

史 林 第九二巻第二号(通巻第四七四号)

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科内

電話 (〇七五) 七五三、二七七八

発行人

史 学 研 究 会

振替京都〇一〇七〇二五二五五番
理事長 藤 井 讓 治

印刷所

中村印刷株式会社
京都市南区上鳥羽藤田二九